ے

れ

1

第一

吾輩は猫である。 名前はまだ無

ć 1

の後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。 感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。そ 落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思った 話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の「掌のなり人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。 けは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生とい 突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。 どこで生れたかとんと見当がつかぬ。 が人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知った。 何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣 どうも咽せぽくて実に弱った。 のみならず顔の真中があまり 掌の上で少し Ŋ ていた事

が 動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。 この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、 胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、 しばらくすると非常な速力で運転し始

りと音がして眼から火が出た。 それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らな

りと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。 が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、どさ2.この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生

いくら考え出そうとしても分らない。対象 いと思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やら た。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。 この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転 a 到底助か 7らな し始

動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が、この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、 と音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。 胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、どさり しばらくすると非常な速力で運転し始めた。 書生が

でも容子がおかしいと、 してしまった。その上今までの所とは違って無暗に明るい。眼を明いていられ てられたのである。 ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠 のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原 ぬくらいだ。はてな何 の中へ棄

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。 吾輩は池の前に坐ってどうしたらよか

3

方 路 もので、 這入ったら、どうに 頸筋に がな なる、 の内に這入っておったのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇 渡って日 でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。 になっ 樹の蔭とはよく云ったものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時 から食物の ° 1 すると間 S をつかん 一に逢 からとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。 腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るという始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。ている。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善いか分らない。そのうちに もしこの竹垣が破れていなかったなら、 そこを我慢して無理やりに這って行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。 が暮れかかる。 た。 ある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。 W つった で表 もなくまた投げ出された。 0) ニャ と寒い 別にこれという分別も出ない。 へ抛り出した。 かなると思って竹垣の崩れた穴から、 のがおさんである。 ĺ のにはどうしても我慢 腹が非常に減って来た。泣きたくても声が出 ニャー と試 いやこれ み これ にやって見 吾輩 は駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に は前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見る は が 吾輩はついに路傍に餓死したかも知れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。 出来 投げ出されては這い上り、 たが誰も来な しばらくして泣いたら書生がまた迎に来 その時におさんと云う者はつくづくいやになっ ん。 吾輩 は ° 1 再 び 今から考えるとその時 おさん そのうち池 ない。仕方がない、 這い上っては投げ出 の隙を見て台所 の上をさらさら 縁 や否 そのうちに どうも んのであ 任 は不思議 せて し はすでに 何でも たの つされ 0) 仕 通

ろうと考えて見た。

てく

である1。

た。

間

おさんの三馬を偸んでこの返報をしてやってから、

やっと胸

の痞が下りた。

吾輩

が

最

をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上って来てをぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上って来て つまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だとい 主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、 かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事に ĺλ ながら出て来た。 下女は吾 困

ようやくの る。 縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。人間臭い所へ出た。ここへ這入ったら、どうにかなると思って竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。と池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這って行くとようやくの事で何となく と試みにやって見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。 別にこれという分別も出ない。 さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善い 泣きたくても声が出ない。 の蔭とはよく云ったものだ。 :が降って来るという始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。 で笹原を這い出すと向うに大きな池がある。 仕方がない、 しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャー この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時 何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろり 吾輩は池の前に坐ってどうしたらよかろうと考えて見 か分らない。 仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな そのうちに暗くなる、 餓死したかも 腹は減る、 腹が非常に減って来 の通路に なってい

へ方へとあるいて行く。

今から考えるとその時はすでに家の内に這入っておったのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機 御台所へ上って来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やおだいといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しても てやってから、やっと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しょ可のを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになった。この間おさんの三馬を偸んでこの返報をし もじいのと寒いのにはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上った。すると間もなく なり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任せていた。しかし、 くぶすじ に遭遇したのである。 また投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、 I惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。や、や、まうといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は、てそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這い、 第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やい 這い上っては投げ出され、 何でも同じ事を四五遍繰り返した ひ

. これはね。